われもまた剣法者

時代小説傑作選

日本文芸家協会 編

講談社文庫

われもまた剣法者（けんぽうしや）時代小説傑作選（じだいしようせつけつさくせん）

日本文芸家協会 編
© Nippon Bungeika Kyokai 1993

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1993年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185491-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

われもまた剣法者

時代小説傑作選

日本文芸家協会 編

〈編集委員〉
伊藤桂一
尾崎秀樹
武蔵野次郎

目次

王朝無頼（ぶらい）　永井路子　七
加賀だいそうどう　戸部新十郎　三七
鰈（かれい）の縁側　小松重男　五三
足軽大将となりて　有明夏夫　九一
折鶴忌　皆川博子　一二八
刀（とう）　綱淵謙錠　一五九
だんまり弥助　藤沢周平　一八三
蛍橋上流　滝口康彦　二三三
ただ一度、一度だけ　南條範夫　二四三
五十八歳の童女　村上元三　二六五
黄泉の国は春の地に　黒岩重吾　二九三
日鋳（にっちゅう）の鏡　陳舜臣　三二八
脱走兵　白石一郎　三五八
解説　武蔵野次郎　三九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

まえがき

村上元三

読者の活字離れが言われはじめ、同時に小説の低調が、いろいろと伝えられる。はたしてそうだろうか。そんなことはない、と言っても、負け惜しみではない。

いまの月刊誌の目次にならんでいる小説の数は、少しも減っていないし、作家の数もどんどん増えている。現代小説、時代小説、推理小説のそれぞれの分野で、安定した活動を続けている人々は、以前より多くなった。ことに時代小説の畑では、不毛を伝えられていた伝奇小説を既成作家が手がけているし、新人も台頭してきている。

この選集の目次を見ただけでも、時代小説の分野がずいぶんひろがっている、とわかるし、この選集が売れているのは、それだけ読者が多い証拠であろう。

大正期に発生した大衆文芸は、戦前から戦後にかけて変貌をとげながら、作家たちの活躍は少しもおとっていない。

十年前は新人だった作家たちも、研鑽を積み重ねて、しっかりした骨格を持った作家に成長してきた。時代小説の畑だけで言っても、読者が離れて行っているとは考えられない。むしろ戦前戦後へかけての、華やかな時代小説の花盛りの盛況を再現している。

作家陣もにぎやかであり、読者の要望にこたえる一方、歴史小説の畑でも、書下しがさかんになってきた。短篇も、いまほど本格的な歴史小説が望まれている時代はなかった、と言っても言いすぎではない。

これからも、時代小説は、ますますさかんになるだろう。そう言っても、自画自賛ではない。この選集を読んでもらえれば、はっきりわかると思う。

昭和五十八年十月

われもまた剣法者

時代小説傑作選

王朝無頼

永井路子

一

都への道は遠すぎた。肩にめりこむ荷物は重すぎた。

――なんでまたこんな役を引き受けさせられちまったのか。いや、それもこれも、因果の種はこの体つきよ。

つい愚痴も出ようというものだ。まったく因果なことに、鈴鹿丸は人と並べば、頭ひとつ群から突き出る。後からついてくる奴には、おめえの肩幅のおかげで先が見えないと言われる。おかげでついつい力仕事を言いつけられてしまうのだが、体格に似合わず力はないのである。

が、誰もそうは思わない。俺は力は無えんだと言いはっても、なに言やがる、骨惜しみするな、とどやされるだけで、今度の都への荷運びも、

「まず、鈴鹿丸、おめえだ」

一番先に押しつけられた。

「そ、そんな、俺は力が……」

必死で抗(あらが)っても、誰も返事もしない。わずかに慰めてくれたのは、母の黒女(くろめ)だけだ。

「お前も十九、都の様子を見てくるのもいい修業だてば」

もっとも、生れ育って以来、ここ美濃の片田舎から一歩も出たことのない黒女には、都で鈴鹿丸を待ちうけているものなどを知るよしもなかったのであるが……。

ともかく肩の荷は重すぎた。いや、荷を重くしているのは包まれた絁(あしぎぬ)や羅(うすぎぬ)、小豆(あずき)や米だけではない。この旅の一番の重荷は、そのあほくささではなかったか。

総勢五十人。それに荷駄をつけた馬三十頭とその口取り。毎度のことながら、行く先は国守(くにのかみ)(長官)どのの五条のお屋敷である。この半年ほどの間に絞りとった年貢のうちからかすめたものをお屋敷に運びこむための旅なのだ。それならなにも、馬の背で運べばいいわけだし、人力よりも効率がいいはずなのだが、五十人もの農民をさらに動員したのはわけがある。

もう国守どのは、四年の任期の終りに近づいている。そこで、農民たちから、直接、

「お慈悲深き国守さまの御再任をなにとぞ」

とお上(かみ)に訴えさせようとして、かくは多数を上洛(じょうらく)させることにしたのである。

――あほくさ！

なにがお慈悲深き国守さまか。どれもこれも似たりよったりの強(ごう)つくばりだが、選りに選って今度のは悪辣(あくらつ)だ、とは農民の日ごろの口癖ではないか。税を根こそぎ取りあげるだけでなく、

「ここは国守さまのお手作りの田だ」
本来なら国有であるはずの田畑を、どんどんわがものとして、そこの耕作に農民を駆りだす。
「こちらのお手伝いばかりでは、お年貢米作りがおろそかになります」
などと言おうものなら、
「なにぬかす！」
国守どのについてきた腕っぷしの強そうなのが、すぐに棍棒をふりあげる。今までよりずっと因業なこの国守に抵抗できないのは、この取り巻きが揃いも揃って短気で悪で無鉄砲だからだ。国守がこうした無頼の徒をひきつれて赴任してくるのは今に始まったことではない。昔は身辺を護衛する防衛隊的存在だったが、このごろは国守の権威をかさにきて、農民を顎でこきつかったり、ちょっとでも納税を渋る家を叩きこわしたりする。
「とりわけ今度のは人相の悪いのばかりだな」
「ああ、斬取り強盗ならまかせておけって面付きだ」
「人殺しなんか平気だと言ったそうだよ」
蔭でぼやいても、農民には抵抗ができない。
——その悪辣な国守どのの御再任を、だって？
なんとあほくさ！
が、それに文句が言えないのは、その中でも一番眼付きの悪い、秦貞友が一行を宰領してゆくからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「いいか、てめえら」
彼は運搬夫に指名された農民たちをじろりと睨みつけると言ったものだ。
「俺の言うことをきかないとどうなるか、わかってるな」
それぞれに担ぐ荷物が割当てられた。善政を施したはずの国守どのが不法に吸いあげた財物を、この際都の自邸に運びこませようというのだから、大した名案ではないか。その上、それぞれ仕立ておろしの麻の水干を一着用意しろという。再任願いにお上にまかり出るとき、国守どのの善政のおかげで、年貢も少なく、生活も潤っていることを、ほれ、このとおり、としめさねばならないからだ。
「ちぇ、もうおれんちには麻の緒ひとかせも無えや」
それでも鈴鹿丸のために、黒女は身内に頭を下げてまわって糸をかき集め、夜も寝ないで一反の布を織り、水干を仕立ててくれた。
「都に行くだからなあ。身ぎれいにせんとなあ」
見たこともない都のことを、母者はどれほど知っていたのか——後になって鈴鹿丸はそう思うのである。

二

まるで馬の尻に鞭でもくれるように貞友に急がされたおかげで、一行は思いのほかに早く都入りした。五条の国守どのの屋敷には蔵町があってがっしりした造りの蔵が軒を並べている。鈴鹿

丸たちが運んできた荷物は、ひとまずここに納められた。農民たちに再任願いをさせる一方で、国守どのはこれらの財物を、せっせとお偉方に献上しようというのだ。

荷物の受けわたしはかなり入念に行われたが、それで農民たちの仕事はひと区切りしたわけではない。

「馬に傷はついてないだろうな。よく洗って、秣飼え」

農民たちよりも馬が大事にされるのは、これもその筋への献上品だからだ。当時の馬は、最高の敬意をこめた贈りもので、今でいえば乗用車に似た意味を持つ。某の国守は、ときの関白に馬三十匹を献じて再任を果したというから、屋敷のあるじどのもそれを狙っているのだろう。

やっと解放され、手足を洗ってひと寝入りすると、たちまち叩きおこされ、薄粥一杯振舞われた後、例の仕立ておろしの水干に着替えて、庭に並ばされた。一足先に帰京していた国守どのへのお目通りである。

「なんだ、たったこれだけか」

国守どのは不機嫌に一同を見まわす。

「尾張守は数百人駆りだしたそうだぞ」

「はっ、それがその……」

威張りくさっていた貞友も、主人の前では身を縮めている。

「やれ病いで動けぬの、足を痛めたのと申すものが多うございましてな。それに薄汚い老いぼれを除き、屈強の者を集めましたので。たとえば、あのような――」

貞友はあきらかに鈴鹿丸を指さしていた。
「ふむ」
国守どのがちらりと眼を向けたので、鈴鹿丸は慌てて平伏した。
「まあ仕方がない。早く行け」
農民たちは貞友に引率されて五条の屋敷を出て内裏へ向った。といっても中に入れるわけではない。天皇の内廷である内裏をかこむようにして諸官衙がある。この周囲にぐるりと、築地が巡らしてあって、十二ヵ所に門がある。彼らの行くのは、その中の一つ、東側の中央の近くにある陽明門だ。
その門を入ったところに、宮中の警固の役所、近衛府がある。閣僚クラスのお偉方の会議はその一角で行われるので、そうした御連中がこの門を出入りする可能性が強い。そこにずらりと並んで陳情に及べば効果的なのだ。一行の中の大人役の一人は、国守どのの善政を書き連ねて再任を願う書状をちゃんと懐中にしている。もちろん彼らに書けるわけがないから、国守どのが書記に書かせた嘘八百である。
陽明門のあたりで鈴鹿丸たちがうろうろしていると、
「なんの用だ」
近衛――つまり宮廷警固の役人が出てきて横柄に聞いた。貞友は、国守どのの前に出たときよりいっそう身を縮めて、なにか小さい声で言う。
「ん？　美濃守の？」

国守どのの名前を聞いても、近衛はさして敬意を払う様子もない。国ではあんなに威張りちらしている国守どのも、都では大した存在ではないらしい。かねて用意していた書状を、大人役がおどおどと差しだすと、二言、三言呟いて、近衛は無雑作に受けとった。多分、大臣はまだおいでなのでないとか、今は会議中だとか言ったのだろう。それを聞いただけで貞友はぺこぺこ頭を下げている。

――なにとぞよろしく。

というところか。それに倣って地に這いつくばって頭を下げながら、鈴鹿丸は、

――こんなことで、書状は、はたしてお偉方の眼に入るのか。

ふと思った。そう思った分だけ、頭の下げかたが足りなかったのか、一瞬その近衛と眼が合ってしまった。慌ててお辞儀の継ぎ足しをし、二度めに顔をあげると、もう彼は門の方へ帰りかけている。

――うん、よし！

貞友は大役を果したと思っているのか、いつになく上機嫌だ。

「さ、来い」

人々を連れて戻ろうとしたとき、いったん門の中に入りかけていた近衛が戻ってきた。

「おい」

「はっ」

弾かれたように取って返す貞友に、近衛はなにか囁いた。その眼が鈴鹿丸に注がれているよう

でもある。貞友は二、三度ぺこぺこ頭を下げていたが、人々の所へ戻ると、

「鈴鹿丸」

近づいて、もったいぶった口調で命じた。

「そなたはここへ残れ」

「えっ」

頭の下げかたが足りなかったんだ――と、鈴鹿丸はぎょっとした。が、貞友の口から出たのは、思いがけない言葉だった。

「相撲人として召し出されることになった！」

三

――なにがなんでも逃げねばならぬ。

体の節々の痛みをこらえて、鈴鹿丸は相撲人の宿舎を這い出した。わけもわからず相撲人に加えられてしまった数日後の夜ふけのことだ。

――今まで命があったのがめっけものだ。ここにいたら殺されるか、手足の骨をへし折られるか……

悪夢の日々とはこういうことを指すのであろう。

「大した幸運だぞ、おい」

近衛に囁かれた貞友は、そう鈴鹿丸に耳打ちしたはずだ。ちょうど秋のはじめで、天皇が相撲

をごらんになる節会が近づいているのだが、近衛の中から選ばれる相撲人の数が足りないのだという。

「それで、急ぎそなたを召し出すと仰せられた。たいへんなことだ。絹やら米やらたっぷりの頂きものもあるし、そのまま近衛として残れば出世の道も開けている」

体がでかいばかりにお召しにあずかるなんて、大した運のいい奴だ――と羨ましげに言ったものだが、相撲人の溜に放りこまれるなり、

「来たか、新入り」

たむろしていた筋骨逞しい連中に、さんざんに投げとばされた。

「ふむ、いい体してやがるじゃないか。さ、稽古をつけてやるかな」

「あ、わ、わ、そのう、私は」

弁解などは聞いて貰えなかった。いやというほど頭から地面に叩きつけられて眼をまわしたのも数度、腰骨が折れるかと思うほど投げとばされたことは数知れず……。

「思ったより弱い奴よのう」

先輩たちは鈴鹿丸の弱さを楽しんでいるかのようである。地面に這いつくばったのを、ひきずりおこしては投げとばす。稽古どころではない。悪意のしごきである。

「お、お、お許しを……」

鈴鹿丸は息も絶えだえに手をあわせた。

こ、このとおり、私は力もなく、相撲もからきしだめで――と言いかけると、この先輩たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton